

Nagano Prefectural Museum of History

長野県立歴史館たより

2023年 夏号 vol.115

主張する古墳

新たなシナノの古墳時代像



特集

令和5年度
夏季企画展

令和5年度

常設展示の紹介

原始

中央高地の縄文文化

～寒冷化する気候の中で～

日本列島には、およそ3,000年前に水稻耕作が伝わり、内陸部への伝播と定着を経て、弥生時代が始まりました。縄文時代は狩猟・採集を^{なりわい}生業としましたが、植物栽培を行い、少しずつ食料生産の時代に移行していたようです。その生産経済の最後の転換期が、縄文時代晩期にあたります。

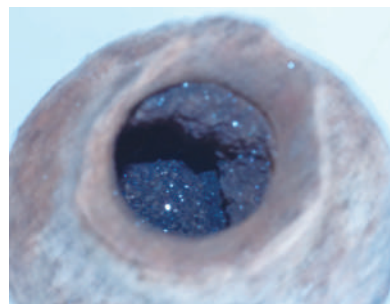
中央高地に位置する信州は、晩期の遺跡数があまり多くはないですが、大きな遺跡がいくつか確認されています。山ノ内町佐野遺跡、千曲市円光^{えんこう}房遺跡、佐久穂町^{ふじ}封地遺跡、大町市^{いつ}一律遺跡、松本市エリ穴遺跡、飯田市石行^{いしぎょう}遺跡などです。

晩期は、縄文時代に4回ほど訪れた小さな寒冷期の最終段階にあたります。集住化や生活適地への移動が行われたのかも知れません。

この頃、東北地方には、いわゆる亀ヶ岡文化が広がり、信州北部に成立した佐野式土器は、^{おおぼら}大洞式土器の強い影響を受けたと考えられています。

今回、展示したのは旧戸倉町に所在する円光房遺跡の出土品です。大洞式や佐野式の土器、石棒^{ゆうけいしきせきぞく}や有茎式石鏃などの石器類。そして何よりも大洞式系の小壺（高さ5.5cm）と、その中いっぱい詰まった「砂鉄」資料です。鉄を知らない縄文人が、キラキラと光る砂鉄を見て、何をおもったのでしょうか。祭りで、焚火に撒いて激しく燃え上がる炎に、“カミがかり”したのででしょうか。真相は分かりませんが、「隕鉄」^{いんてつ}などとともに、彼らが最初に出会った「鉄」関連素材のひとつとして、大変貴重な資料です。

（町田勝則）



砂鉄のに入った小壺（千曲市教育委員会蔵）

古代・中世

祈りの形

～平安時代の仏教信仰～

仏教が日本に伝えられたのは6世紀の中頃とされていますが、当時は天皇や豪族など一部の人たちが取り入れた新しい信仰にすぎませんでした。奈良時代、聖武天皇の在位（724～749）になり、国策として仏教が推し進められることで、より広く仏教が知られるようになったと考えられます。

平安時代になると、仏教信仰が寺院といった特定の場所から一般的な集落にも波及していた状況が、遺跡の出土遺物からわかっています。

千曲市社宮司遺跡から出土した「六角宝幢」^{ろっかくほうどう}は、国内で初めて確認された木製の傘塔婆^{かさとうば}（供養塔）で、平安時代末期の11～12世紀ごろのものと考えられています。文字通り「六角」に整えられた幢身^{どうしん}には、笠や風鐸^{ふうたく}といった装飾具が取り付けられ、組み上げると高さは180cmを超えます。

当時の民衆がどのような祈りをささげていたのか正確なところはわかりませんが、幢身の表面には阿弥陀如来が描かれていた痕跡も確認できることから、極楽浄土への往生を願う浄土信仰の一端を示す貴重な資料といえます。

2011年に「長野県宝」に指定され、現在は温湿度を管理した特別収蔵庫で保管しています。今年度はレプリカの一部を常設展示室で展示しますので、ぜひご覧ください。

（柴田洋孝）



六角宝幢【合成復元】（当館蔵）

小テーマ「近世の学問」では、信濃出身で学問にひたむきに向き合い、後に影響を与えた人物を取り上げます。(10月から展示)

そのひとりが国学を学んだ松尾多勢子(1811～1894)です。多勢子は、伊那郡山本村(現在の飯田市)に生まれました。父親の実家が尊王思想を重んじる豪農であったこと、母方の曾祖父は勤王に厚かった人物であったことなど、幼い頃からその気風の影響を受ける環境で育ちました。結婚してから松尾姓を名乗り、家事や育児のかたわら和歌や国学を学びますが、実際に勤王活動に寄与したのは52歳以降です。夫の許可を得て家を出て、上京したという行動力に驚きます。京都市麩屋町に仮住まいし、多くの志士と交流、意思疎通をはかる役割をつとめていたようです。

展示資料の「懐刀」は、足利三代木像梟首事件で長州藩邸に潜伏した時、藩主毛利敬親から与えられたものの複製です。

後で蠟色塗りに加工し、金時絵で本居宣長の歌

をちりばめ、愛用していたといえます。多勢子の女性志士としてのエピソードを物語る資料であると考えます。



まだ女性の社会的地位が確立していなかった時代に、「皇学に熱心な歌詠みで尊王心の強い質朴な田舎出の嬢(年齢を重ねた女性)さん」と慕われた多勢子の生き様からは、変革の時代にも負けなかった学問への力強い姿勢が感じられます。多勢子の他に、松代藩士・佐久間象山についての資料なども展示します。(河野智枝)

近現代

近代の物づくり

～昭和戦前期の掛け時計～

常設展示室近現代コーナーで、令和4年度新収蔵品であるゼンマイ式掛け時計を展示しています。

振り子時計は、振り子と連動するツメが歯車を少しずつ回すことによって時針を進めていきます。当館所蔵の掛け時計スケルトンモデルでもこの仕組みを確認することができますので、ぜひご覧ください。



当館所蔵の掛け時計は、時計内部に記載された内容から、名古屋商事株式会社製造の掛け時計であることがわかります。本時計の正確な製造年代はわかりませんが、名古屋商事株式会社が名古屋市林時計店から事業を引き継いだ大正6年以降と考えられます。

使用されている文字は、ストロークの先に飾り

がなく、読みやすいジオメトリック・サンセリフ書体が用いられています。文字盤にゼンマイを巻くための穴があり、向かって右側は振り子によって時針を進めるためのもの、左側は打刻のためのものとなっています。ここに巻鍵を差し込んでいっぱいまで回すと、おおよそ8日間稼働するため、「8日巻掛け時計」と呼ばれています。



精巧な仕組みによって正確に刻まれる時間とあたたかみのある打刻音から、近代の物づくりの歴史を感じることができる資料です。

近現代エリアでは、時計をはじめ、蓄音機や真空管式ラジオなど、メンテナンスと修理を行い、動態保存と展示に努めています。(内城正登)

夏季
企画展

主張する古墳

— 新たなシナノの古墳時代像 —

会期 | 令和5年7月1日(土)～8月20日(日)

刷新される古墳時代のイメージ

古墳時代というと、畿内王権やヤマト王権と呼ばれる中央勢力が地方を征服していく時代、というイメージを抱かれるのではないのでしょうか。

日本最大の^{だいせん}大仙古墳（大阪府）などにみられるように、畿内地域を中心として日本各地に前方後円墳が造られました。しかし、その中央勢力が古墳時代社会のすべてを主導していたわけではないと言われるようになってきました。

例えば大陸からの渡来系文物は、これまではすべて畿内の中央勢力を通して各地に配布されていたと理解されていたのですが、畿内を介さずに直接大陸と交渉し入手していた地域があることが指摘されるようになってきました。

つまり、畿内対地方という構図だけでは語れない古墳時代像が描かれるようになったのです。

シナノにおける古墳出現前夜

シナノの古墳というと、教科書にも登場する森將軍塚古墳（千曲市）が思い当たります。現地を訪ねると、古墳が高い山の上にあることに驚きます。

山の上に墓を造るのは、弥生時代の末期からみられます。^{あんげん}安源寺城跡遺跡（中野市）や^{きただい}北平1号墳（長野市）など、長野県北部、北信地域に多くみられ、山の上に方形の墳丘墓^{ふんきゅうぼ}を築いていきます。これらは独立して築造され、弥生時代でも低地に群集するような墓とは大きく異なります。

弥生時代までは、山の地形を改変するような大きな開発は行われてきませんでした。ところが弥生時代末期になると、突如として山の開発を始めたのでした。

このような山の上の墳丘墓では、東海や北陸の土器が出土しており、徐々にシナノの社会が外のものを取り入れ始めたことがわかります。

シナノ最古の古墳

シナノ最古の古墳は、^{こうぼうやま}弘法山古墳（松本市）です。当時、「倭国大乱」と記された動乱を契機として、東海地方の人々が東日本各地へと到来しており、松

本盆地でも東海地方から移動した人々が集落を営んでいました。弘法山古墳が造られた背景には、そ



弘法山古墳出土 半三角縁四獣文鏡
(松本市立考古博物館蔵)

のような外来集団の統制と流通ルートの安定化という意図があったのでしょう。

いよいよシナノの社会も倭国の情勢と大きく関係してくるようになりました。

北信、長野盆地の前方後円墳群

その後、大型の前方後円墳が、森將軍塚古墳をはじめとするシナノの北部、長野盆地に多く造られるようになります。一見、有力な一大勢力が登場したかのように見えますが、千曲川を挟んで右岸と左岸に交互に造られるなど複数の王が並立していたと考えられます。

森將軍塚古墳の^{さんかくぶちしんじゅうきょう}三角縁神獣鏡や^{いしかわじょうり}石川条里遺跡（長野市）で発見された祭祀遺構などに畿内との関係がみられるようになります。その背景には、前代の弥生時代後期に流通し始めた鉄器が関わっていたと考えられます。

弥生時代後期には、千曲川をさらに遡った佐久地域で多くの鉄器が出土します。これらの鉄器は大陸から入手したもので、佐久地域はその流通拠

点となっていました。

長野盆地は、広大な可耕地と多くの集落を抱えていました。そこで畿内王権と結びつき、その支配秩序を取り入れることによって鉄器流通の主導権を奪取しようとしたのでした。

古墳築造の背景には、単に畿内王権との関係だけではなく、そのような地域の事情をみることができます。



石川条里遺跡出土祭祀具（当館蔵）

方墳の登場と騎馬文化の到来

5世紀、古墳時代中期になるとシナノの北部では大型前方後円墳は造られなくなり、代わってシナノの南部、飯田・下伊那地域に大型古墳が築造されるようになります。これまでの研究では、北から南へ勢力が移ったと理解されてきました。果たして北の地域は、衰退したのでしょうか。

この頃、北信地域には方墳が造られるようになります。またそれまで前方後円墳が造られなかった東信、中信地域でも大型の方墳が出現してきます。

それらの方墳をみると、朝鮮半島などの畿内以外からもたらされた文物が副葬さ

れていました。特に飯綱社古墳（長野市）や大星山2号墳（長野市）からは、朝鮮半島製の馬具が出土しており、朝鮮半島から直接もたらされたと考えられます。



榎田遺跡出土馬具（当館蔵）

また、^{えのきだ}榎田遺跡（長野市）からは未成品の木製馬具が出土しており、馬具を製作していたとみられます。

日本列島には本来、馬は存在しておらず、高句麗の南進により、倭国でも騎馬生産の機運が高まってきました。この北信地域では、朝鮮半島の勢力と交渉を始め、馬生産を開始したと考えられます。

馬生産を担った南信の王

南信の飯田・下伊那地域において、5世紀以降に大型の前方後円墳を造り始めた背景には、馬の生産が考えられています。

高まる騎馬の需要により、畿内王権は、馬生産の地の一つとして飯田・下伊那地



溝口の塚古墳出土甲冑（飯田市考古博物館蔵）

域を選択したのでした。^{みぞくち}溝口の塚古墳（飯田市）の^{おびがねしきかつちゅう}帯金式甲冑は、畿内王権から配布されたもので、後に、^ま馬背塚古墳（飯田市）のような大型の横穴式石室なども造られることから、この馬生産は畿内王権主導で行われたと考えられています。

大陸と結びついて馬生産を取り入れた北信地域とは対称的なあり方をしています。

新たなシナノの古墳時代像

古墳時代は、多くの人・モノが往来した時代でした。それは当時巻き起こった東アジアの動乱に起因するもので、畿内王権との関係だけでは理解できるものではありません。また、行き交う多くの人・モノで成り立った地域は、多文化共生という社会の一側面があることを認識されます。改めて、シナノという地域の人々の目線で古墳を見ていただきたいと思います。

（石丸敦史）



「定住」のはじまりを考える



「定住」とは何か。人類学者渡辺仁は「1年中恒久的住居に住むという居住様式」と定義しました。人類誕生以来、数百万年続いた遊動生活と決別する過程は、極めて重要な出来事でした。定住に伴う生活・文化の変革には、居住場所の確保・食料の保存・出産や死者の埋葬・部族間の闘争・宗教の発達など枚挙に暇がありません。中でも植物栽培や動物飼育は、人類にとって画期的な第一歩であり、考古学者G.チャイルドは、それを「革命」と呼びました。留意したいのは、自然人類学者西田正規の指摘した、植物栽培は定住によって派生・出現するもので、おのずと変化した人間と植物の生態学的関係であるということです。

人間が一日に歩いて行動できる範囲は僅かに10Km程度といわれています。そうした行動範囲内でのみ狩猟や採集を行えば、食料は激減し、やがて枯渇を招く危険に至ります。人間が生きるためには食料確保が必須となります。狩猟採集民として会得した自然界の生態的知識を軸に、植物栽培を開始したとしても不思議はありません。渡辺は「退役の狩猟者」こそが、食料生産を主導したとまで言及しています。今後は、植物ばかりか動物飼育の始まりをも考えていかなければなりません。

日本列島では約16,000年前に土器が発明され、

定住化へと向かいました。漁業に生業を置く海岸部では縄文時代の早期後葉に、中部山岳等内陸部では前期後葉までに本格的な定住が始まったと考えられます。稲作を根幹とする食料生産の時代を迎えてから3,000年近くが経ちました。

今日、日本の食料自給率は38%程度（カロリーベース）、60年前の1/2程度まで落ち込んでいます。ある調査では、米の消費量の大幅な低下と、肉類、乳製品の増加に関連するとしています。縄文人が良しとして選択した米を食べなくなったのです。食肉用の家畜は、専ら輸入された飼料で育てられ、あるいは、その肉を輸入に頼ります。自給自足では賄いきれない。国際紛争などの影響で供給が追い付かないことも、しばしばあります。

ニュースでは「毎日食べる卵が入荷しないのは困る」との声も聞かれ、食料を100%購入して暮らすスタイルが主流になりました。一方で野生のシカやイノシシは害獣として殺処分されています。

定住はあらゆる面でヒトを束縛します。食料のみならず、共同体、学校、仕事場など。時にその束縛を回避する手段をヒトが模索するとしたら、定住以前とそれ以後の生活、社会を探究することで、何らかのヒントが得られるのかも知れません。

(町田勝則)



岩手県御所野遺跡の縄文ムラ復元



鹿児島県上野原遺跡の縄文ムラ復元

古文書の流出を防ぐために

2018（平成30）年「文化財保護法」が改正されました。文化財を中・長期的な観点で地域のなかで継承していくため保存・活用のグランドデザインを描くことが求められるようになりました。

私たちがこのところ心を痛めているのは、地域の歴史を物語る古文書そのものが散逸の危機にあるという現実と直面していることです。

「平時の災害」という言葉をご存じでしょうか。自然災害や事故など突発時には、古文書や民具なども被災し散逸してしまいます。これに対し「平時の災害」というのは、何気ない日常のなかで起きます。大量の古文書類がインターネットで売買されたり、家や土蔵の取り壊しで一緒にゴミとして焼却されてしまう事態がこのように静かに進行する災害を指します。社会状況が変化し、以前のように個人で古文書を所持し続けることが困難になってきたことも背景にあるでしょう。より深刻なのは、所蔵者や地域が文化財への関心を失いつつある点かもしれません。

実は古文書の散逸は近年の問題ではありません。1918（大正7）年、当時の県知事赤星典太は「県誌編纂に着手せんと思ひますけれども、編纂に先立ち資料の収集をせぬければならず、しかして歴史的資料の如きものは時とともに湮滅致すおそれある故に、その湮滅を防ぐとともにこれを世に公にして将来の県誌編纂の材料たらしめん」（長野県行政文書）と述べています。資料の散逸防止のために資料を収集し、それを材料として『長野県史』を作ると明言したのです。

実際に県史編纂事業がスタートしたのは1929（昭和4）年になってからです。編纂主任となった栗岩英治（写真1）は散逸危機にある古文書類を収集していきました。当時はまだ長野県には博物館はありませんでしたが、栗岩は「博



（写真1）栗岩英治（当館蔵）

物館が出来たら、それに委託するのが一番安全な道であろう」と述べています。実際、その一部は現在県立歴史館に引き継がれて大切に保管されています（写真2）。



（写真2）栗岩が収集した大滝文書（当館蔵）

県立歴史館には全国の古書店・美術商などから「売立目録」などが送付されてきます。そこに掲載されている県関係の文書類をリスト化しています。そして関係する市町村の文化財担当の方に情報を提供し、共有化しています。現在、古書市場にあらわれている流出文書の数、あくまでも氷山の一角です。十分な予算措置を講じることは大切ですが、全て購入することは現実的には不可能です。文書が売り立て目録に出たら買う、というモグラたたきではなく、モグラが出ないようにその元を絶つための水際対策が長期的な展望のなかで必要ではないでしょうか。

個人の家の文書だから処分は自由だ、という考えもあります。しかし江戸時代の文書の多くは、名主などが村の行政事務上で作成した「公文書」という側面も有しています。地域にとって必要な、歴史を語る立派な共有すべき知的財産であり公共財です。この公共財が処分されてしまえば、地域の人々の記録も消え失せてしまいかねません。

学校や地域で足元の歴史を学びなおしたり、古文書講座に参加することは、こうした意識づくりを進めるうえで大切ではないでしょうか。

ご自宅を整理した際に古い書きつけなどが出てきてお困りの際は、ぜひご一報くださいね。

（村石正行）

INFORMATION

インフォメーション

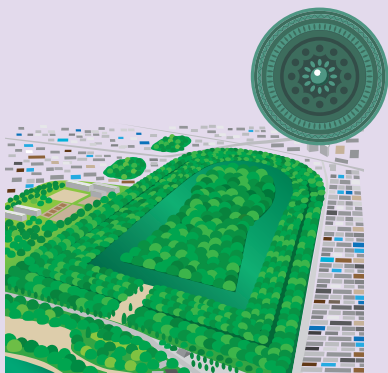
■2023(令和5)年 6月～9月の行事予定

6月

休館日

5・12

19・26



講座・イベント

古文書講座

初級	A	第1回	6月4日(日)
	B	第1回	6月8日(木)
中級	A	第1回	6月3日(土)
	B	第1回	6月8日(木)
上級		第2回	6月24日(土)

県立歴史館講座

第2回 6月10日(土) 13:30～15:10
「シナノから科野そして信濃へ」
講師：元当館考古資料課長 西山克己氏

考古学講座

第1回 6月17日(土) 13:30～15:00
「主張する古墳」
講師：当館考古資料課 石丸敦史

7月

休館日

3・10

18・24

31

夏季企画展

主張する古墳

～新たなシナノの古墳時代像～

7月1日(土)～8月20日(日)

■講演会

7月29日(土) 13:30～15:00
「シナノの騎馬文化と古代東アジア」

講師：諫早直人氏
(京都府立大学准教授)

※事前申込制 定員120名

■ワークショップ

「古墳の設計図を描いてみよう」
7月22日(土) 13:30～

※事前申込制

■古墳周遊イベント

「フォトコンテスト
ー信州の古墳を撮るー」

古文書講座

初級	A	第2回	7月2日(日)
	B	第2回	7月6日(木)
中級	A	第2回	7月1日(土)
	B	第2回	7月6日(木)
上級		第3回	7月22日(土)

考古学講座

第2回 7月1日(土) 13:30～15:00
「中野の古墳に行ってみよう」
講師：中野市教育委員会 柳生俊樹氏
第3回 7月15日(土) 13:30～15:00
「松本の古墳に行ってみよう」
講師：松本市教育委員会 小山奈津実氏

考古学講座

第4回 8月5日(土) 13:30～15:00
「諏訪の古墳に行ってみよう」
講師：諏訪市博物館 児玉利一氏
第5回 8月19日(土) 13:30～15:00
「飯田の古墳に行ってみよう」
講師：飯田市教育委員会 春日宇光氏

古文書講座

ティーンズ	第1回	8月3日(木)
	第2回	8月4日(金)
初級	A	第3回 8月20日(日)
	B	第3回 8月24日(木)
中級	A	第3回 8月19日(土)
	B	第3回 8月24日(木)
上級		第4回 8月26日(土)

イベント「歴史館で夏休み」
8月6日(日)

8月

休館日

7・21

28

9月

休館日

4～14

19・25

※9月4日(月)～9月14日(木)は
全館くん蒸のため休館となります。

秋季企画展

信州やきもの紀行

10月7日(土)～11月26日(日)

古文書講座

初級	A	第4回	9月17日(日)
	B	第4回	9月21日(木)
中級	A	第4回	9月16日(土)
	B	第4回	9月21日(木)
上級		第5回	9月30日(土)

表紙写真の解説

史跡 森將軍塚古墳(千曲市)

シナノ最大の古墳で全長約100mの前方後円墳です。史跡整備され、往時の状況が再現されています。

松本市弘法山古墳の 半三角縁四獣文鏡(松本市立考古博物館蔵)

長野県宝。弘法山古墳は、シナノ最古の前方後円墳です。鏡は権力の象徴でした。鏡背面に4体の獣文様を施しています。

飯田市畔地1号古墳の 垂飾付耳飾(復元複製／当館蔵)

朝鮮半島で流行した金属製耳飾りです。大陸から到来した馬生産を担った人物のものと考えられています。

行事アルバム

***** 歴史館でこどもの日 *****



5月5日(金・祝)は「歴史館でこどもの日」でした。プラ板マスコットづくりや歴史館ワードパズルに参加していただきました。プラ板マスコットづくりでは、親子、兄弟、お友達で楽しく制作、おそろいのマスコットを作る姿もありました。歴史館ワードパズルでは、正解がわかったお子さんに手作りオリジナルストラップなどをプレゼントしました。天気にも恵まれ多くのお子さんが来館してくれました。

**** 至宝の名品 古文書編 ****



2023年所蔵品展が5月28日で終了しました。観覧された皆様から「一枚の紙の史料からも昔の人の生活や政治のありさまが伝わってくるように見えた」、「字はほとんど読めなかったが花押などから当時の息づかいまで感じられた」などの感想をいただきました。今年度の3月には2024年所蔵品展の開催を予定しています。ご期待ください。

長野県立歴史館たより 夏号 vol.115

2023(令和5)年5月31日発行
編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市大字屋代260-6
電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
E-mail: rekishikan@pref.nagano.lg.jp
ホームページ: <https://www.npmh.net/>

印刷 奥山印刷工業株式会社